



Title	老年者用知能テストに関する研究 : 阪大式老年者用知能テスト
Author(s)	井上, 修
Citation	大阪大学, 1975, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/31296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	井 上 修
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 3 2 5 9 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 1 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	老年者用知能テストに関する研究 —阪大式老年者用知能テスト—
論文審査委員 (主査)	教授 金子 仁郎
	(副査) 教授 佐野 勇 教授 西川 光夫

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

初老期または老年期の精神障害のなかで痴呆性疾患のしめる率が高い。また、他の精神障害の場合にも、その発症や病態像が、知能低下の影響を受けていることが多い。したがって、これらの年令層の精神障害においては、つねに知的状態を把握しておくことが重要であり、そのためには客観的指標となる測定法が必要となる。しかし、現在老年者に対するテストとして具備すべき条件を満たした知能テストはみられない。この必要性にもとづき、本研究では、

- 1) 簡易であり、短時間に完了しうること。
- 2) 多くの clinical condition に適用しうること。
- 3) 検査時点の横断的な知的機能の把握とともに、過去の状態と比較し、知能低下の有無の判定ができること。

などの条件を満たすようなテストを作製し、その標準化を試みた。

〔方法ならびに成績〕

実験方法：

- 1) 対象：本研究には50才以上の対象826名を用いた。
- 2) テスト内容：Wechsler Memory Scale を基礎にし、若干の改良を加えて15～25分で完了しうるテストを作製した。
- 3) つぎの2種類の方法で標準化をおこなった。
 - i) 知能低下を判定するための標準化

多くの情報を集積し、臨床的に知能低下の有無を判定するのと類似の判定を、本テストの成績のみでなしうるようにするためのもので、これには判別関数を使用した。

ii) 横断的な知的特性を推定する方法

被検者の知的特性を評価するために、500名のテスト成績を因子分析し、本テストで測定される知的因子を推定し、因子評点を算出しようとした。

実験経過ならびに成績

1) 知能低下を判定するための標準化

i) 50才以上500名の対象について、生活歴を調べ、臨床的観察をくり返し、過去の知的状態を推定し、現状との比較をおこない、あらかじめ定めた基準にてらして、知能低下の有無およびその程度の判定をおこなった。その結果正常177名、軽度知能低下196名、痴呆127名であった。

ii) 対象に本テストを使用した。各テスト項目の成績に関して、上記3群間での有意差検定をおこなった。Welchの検定で、全項目1%以下の危険率で有意差を認めた。

iii) 本テストの成績によって、臨床的分類に匹敵する分類をおこなうため、判別関数を求めた。

iv) 上記の500名を本テストによって判別した。臨床的分類との一致率は88.8%であった。

v) あらたな133名の対象について、両者の一致率は77.4%であった。

vi) 臨床的分類の各群に属するものの知能指数をWAISによって調べた。いずれの群においても知能指数のバラツキが大きかった。

vii) 本テストの項目の代りに、WAISの項目を用いて、同様に判別関数を求めた。臨床的分類への一致率は本テスト項目の場合が85.9%、WAISの場合が80.7%であった。

viii) 同一被検者に、ある間隔において、本テストを2回施行した。両者の判別は80.5%が一致した。

2) 横断的な知的特性を推定する方法

i) 500名の成績の主成分分析をおこない、本テストで測定される主な知的因子は3つと推定された。

ii) 直交回転をおこない、各因子の解釈をし、a) 論理的思考およびその記憶、b) 機械的記憶、c) 知的活動の流暢さ、と命名し、さらに各因子の因子負荷量の符号によって、それぞれの因子を2分し、修飾的解釈をおこなった。

iii) 6つの因子評点を算出しようようにした。また826名の成績により各因子評点の基準をつくり、それを図型化し、それと各被検者のprofileを比較することによって、知的特性を推測するようにした。

iv) 56種の知能テストを因子分析したThurstoneの因子と本テストの因子は類似していた。

v) 同一対象にテストを2回実施し、各因子評点について信頼度係数を求めた。最高0.923、最低0.621であった。

[総括]

1) 簡便な老年者用知能テストを作製し、判別関数を利用することによって、知能低下の有無、程度を判定することが可能となった。

2) 因子分析により、本テストで測定しうる知的要素を抽出し、6つの因子評点によって被検者の知的特性を推定しうるようにした。

論文の審査結果の要旨

初老期、老年期の精神障害において、知能低下は主要な症状であり、これの正確な把握は臨床上きわめて重要である。したがって、これを客観的に表示しうる測定法が必要であるが、老年人に適したものはみられない。そこで著者は、短時間に容易に実施しうる簡便な知能テストを作製し、2種の方法で標準化をおこなった。1つは被検者の知能低下の程度を判定するためのものであり、他の1つは因子分析法を利用し、因子評点によって被検者の知的構造を推定するものである。さらに、このテスト内容および標準化の妥当性、信頼性を種々の面から検討し、本テストの臨床的実用性を実証した。

即ち、本論文の成績は、知能低下の判定と知的特性の推定を、きわめて簡単なテストによっておこなえるようにした点にあり、また知的構造の分析的表示は、今後痴呆性疾患の分類や、大脳病理学的所見と知的障害の現象面との関連性を求める点で重要な指針を与えるものであり、学位論文として十分価値あるものと認める。